

## 秋の悲しみ

### 四組 今道周雄

- 李泰院いてほんの魔力に惹かれ集まりし若者たちのむごき死哀れ  
立ったまま窒息死した人もいたという、異常なまでの密集はなぜ起こったのか？  
この異常な心理は中々説明がつくものではなからう。
- なれむつが妻をなくせし友ありて秋は悲しみや増さるらむ  
電話口では淡々と「いま遺品の整理中だが、着るものの多さに驚いた。」などと言  
っていたが、さぞかし寂しく悲しく感じていることだろう。
- 秋色を纏まといし並木に守られて直すくぐなる道は北へと向かう  
テニスに通う道は県道七一一号線である。農地であったところに新たに作ったため  
に、直線が続いている。並木のポプラの葉が黄色くなり、はるかに遠くまでそれが  
続いている。
- 藁を焼く煙漂う足柄野田圃で遊びし昔懐かし  
稲を刈り終わった田圃は子供たちの絶好の遊び場であった。藁を焼く煙の匂いがそ  
のころの記憶を呼び起こす。
- 銀杏を貰い姉妹の幼子は手紙を書きて喜び述べる  
隣家の幼い姉妹は、姉の目はブルー、妹の目はブラウンである。最近よくお話をす  
るようになったが、私には半分も理解できない。でもお手紙を貰って二人が喜んで  
いることがよく分かった。
- 嵐山紅葉求めて辿り来て常寂光寺の塔頭高し  
午前中で高瀬川沿いにある客先での仕事が終わわり、午後は嵯峨まで足を延ばすこと  
にした。嵯峨嵐山駅から常寂光寺を目指して歩き始めたが暑い。ネクタイを外し背  
広を脱いでひたすら歩いた。山門にたどり着いたころには靴擦れができていた。  
久しぶりに履いた革靴で長距離を歩いたのが間違이었다。木の間に暮れに見える  
塔頭まではまだ相当のぼらなければならぬ。